



TITLE:

<大會抄録>バーミアーン石窟と彌勒信仰

AUTHOR(S):

小谷, 仲男

CITATION:

小谷, 仲男. <大會抄録>バーミアーン石窟と彌勒信仰. 東洋史研究 2001, 60(3): 564-565

ISSUE DATE:

2001-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/155385>

RIGHT:

が、どのような基準によって、報捐應試して官僚・士人への道をたどることのできない「汚賤」な者と見なされたのか。その基準は必ずしも明快に示されているわけではないが、各事例における論議の筋道をたどるなかで、當時の人々に共有された良賤區分の論理をさぐることができよう。

本報告では、第一に、地方における冒捐冒考紛争がどのようにして『學政全書』や『大清會典』の規定を生み出していったのか、その具體的な過程を検討する。第二に、「賤」の觀念をめぐる地方社會と中央政府のずれも含め、當時における「賤」觀念の核心と幅について考察する。さらに、中國の良賤制度の歴史のなかで、このような清代中期の事態をどのように位置づけるべきか、若干の見通しを示してみたい。

戰國時代の尖足布・方足布の性格について

江 村 治 樹

尖足布、方足布と呼ばれる形式の青銅貨幣は、中國の戰國時代、三晉地域を中心に流通したと考えられる貨幣である。これらの貨幣には、ほとんど例外なく地名が鑄込まれており、その地名の種類も多数にのぼる。そして、それらの地名は文獻史料にあらわれる三晉地域の都市名と一致するものがかなり見られ、これらの貨幣と都市との關係が想定される。これらの貨幣は、三晉地域の都市の性格を考える上で貴重な材料と言うことができる。

これらの貨幣と都市との關係を考える場合、まず第一に、貨幣がはたして地名が鑄込まれた都市で鑄造、發行されたものなのかを確認する必要がある。そしてその上で、發行主體がどこにあったのかを明らかにする必要がある。しかし、既存の文獻史料には三晉地域に係わる貨幣の記述は見られず、もちろん尖足布、方足布の存在や流通を示す記載も一切見られない。したがって、これらの貨幣の發行主體や都市との關係を考えるには、尖足布、方足布という實物資料そのものからのアプローチによらざるをえない。そこで、實物資料を用いて次の四つの側面から、以上の問題を解明するための初步的検討を加えたい。

一、貨幣に鑄込まれた地名と文獻史料の地名、それに對應する都市遺跡との關係の検討。

二、貨幣の出土地と貨幣の地名との關係の検討。

三、同一地名の貨幣の文字と形態の検討。

四、貨幣の鑄型の出土地の検討。

バーミアン石窟と彌勒信仰

小 谷 仲 男

一九七九年の舊ソ連軍の侵攻とともに始まったアフガニスタンの内戦は現在に至っても終わらない。内戦は多くのアフガン難民を流出させたばかりでなく、アフガニスタンの貴重な世界的文化財を破壊しつつある。二〇〇一年三月のバーミアン大佛の爆破は世界を

驚愕させた。それを報道した日本の新聞各紙はバーミアン大佛の創建を七世紀とか五世紀とか伝え、一定しない。いったいバーミアン大佛は北魏の雲岡石窟より新しいものなのか、それともそれより古く、東アジアにおける大佛建立の先驅となった歴史的遺産なのか。

七世紀創建という遅い年代の最近の提唱者はアフガン人考古學者Z・タルジ博士である。博士はバーミアン石窟裝飾意匠の詳細な研究を發表し（一九七七年）、五五m大佛足下の石窟を飾る渦巻形唐草文をアジャンタ石窟やフォドキスタン寺院址のものと比較して七世紀という年代を得た。それにつられて三八m大佛の天井壁畫のキダーラ・クシャン式王冠をつけた寄進者列像をも七世紀のエフタルやトルコ人を描いたものと判定した。私は大佛創建當時の唐草文を五五m大佛自身の天井壁畫に見出した。それはガンダーラ彫刻の傳統をひく半パルメット波狀文であり、塑造の渦巻形唐草文は後補されたものであった。

最近タルジ博士の結論に追隨する研究者が多いが、七世紀という年代ではバーミアン壁畫に表現される熱烈な彌勒信仰と二大石佛の正しい意味を理解できないであらう。